
マプラヴ～流されてきた男～

サル－イン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラー流ってきた男

【Zコード】

Z2444P

【作者名】

サルーライン

【あらすじ】

処女作です。駄文ですが、頑張って完結させて生きたいと思います。

大まかに書きますと1年戦争を生き抜いた技術仕官兼テストパイロットがシャアの反乱の中サイコフレームの光によりOGの世界に迷い込みヴァルシオン改とガーバインと共にマブラーの世界に来てします。

まあお話です

プロローグ（前書き）

特に変えた部分はありません誤字の修正だけです

プロローグ

プロローグ

「懐かしい記憶を呼び起こす」

宇宙世紀0093年

グリップス戦役で行方不明となつたクワトロ・バジーナことシャア・アズナブルは

ジオン・ズム・ダイクンの息子、キャスバル・レム・ダイクンとして表舞台に帰還、

難民用コロニーのスウェイートウォーターを拠点としてネオ・ジオンを興し、ジオン・ズム・ダイクンの理想を実現すべく地球連邦政府に宣戦を布告した。

しかし地球連邦政府は、地球連邦軍の戦力がネオ・ジオン軍のそれより圧倒的だつたことと、宇宙での出来事に

無関心なことから、危機意識は非常に希薄だつた。

ルナツーを占拠したネオ・ジオンは、貯蔵されていた核兵器を奪取し、

更にダミーによって行動を隠蔽していた主戦力による奇襲で、小惑星アクシズをも奪取する。

これにルナツーに貯蔵されていた核兵器を用いてアクシズの核パルスエンジンに点火、

地球への落下コースに乗せる。

シャアの真の意図は、アクシズ落下と地表付近での核爆発により核の冬を引き起こし、

地球連邦政府もろとも地球を汚染し続けるアース・ノイドを絶滅させようとしたものだつた。

また、地球を人間が住めない場所にすることで地球への固執を排除し、人類全てを宇宙で生活させ、ジオン・ズム・ダイクンの提唱したニュータイプへと導こうとした。

しかし、アナハイム社で建造されていた ガンダムが完成し、アムロ大尉の駆る ガンダムを筆頭とする同部隊の奮闘によって、多大な犠牲を払いながらも、アクシズを護衛するネオ・ジオンの戦力を撃破していく。

この時アクシズは、もはや阻止不可能と見えるほど地球に接近している中、

アムロ・レイ大尉は単機でアクシズに取り付き、MS一機でこれを押し戻そうという、

無謀とも思える勇姿を見せた。

更に、命令が出たわけでもないにもかかわらず、周辺空域を警戒していた連邦軍の艦隊が、引きつけられるようにアクシズに集結。

ネオ・ジオン兵までがアムロの行動に同調し、敵同士のはずの双方が、死を覚悟しながらのアクシズ落下 阻止に尽力すると、いつ奇跡的な事態となつた。

そんな中、俺ことリョウ・アサクは、友軍機と連邦軍機の会話に耳を傾けながら、

愛機の AMX-009 『ドライセン』でアクシズを押し揚げていた。

アムロ「やめろー。」
「ここに付き合つ必要はない！」

さがれ！ 来るんじゃない！」

連邦兵A「ロンド・ベルだけにいい格好させませんよー。」

ネオ・ジオン兵「地球が駄目になるか、どうかの瀬戸際なんですかね？」

この戦場でお互い戦い合い傷つけあつた者達が一つの目的のために協力し合つている。

突然近くのジム？が爆ぜた・・・理由は多分摩擦熱と機体のオーバーロードで自爆だと思われる。

そういう、自分の愛機も摩擦熱とこれまでの過度な近接戦闘の影響で内側からガタが来ていた。

アサク「まったく歳は、取りたくないモノだな、頼む・・・持つてくれよ」

つと漏らし自機を最大出力を噴かす。

直後、アクシズを押し上げていたMSの群れの中心部から発せられた摩訶不思議な光は、ガンダムを残し次々と他のMS達を払い退けていった。

アサク「・・・これが・・・サイコフレームの共進・・人類のk・・
つな！？ 不味い・・

そして、自分の機体もサイコフレームの光の渦に飲み込まれ意識が遠のいていった・・・・・

現在

? ? ? 「・・・・・ t い ・・・ a サク 大尉！」

ん？思い出に浸っているうちに、誰かが俺に呼んでいる。

？？？「無視すんなやあゴラアアアアアア！」

アサク「うお！？ 白井少尉・・か・・はあ～頼むからボリュ

ーム全開での交信は、

体に悪いから、あれほどやめてくれと言つただろ

う？」

とヘルメットから聞こえてきた音源の元に文句を飛ばす。

白 井少尉「何が、体に悪いですか！ 戦闘中に思い耽つてないでしつかりしてくださいまし！」

桃色をした可愛らしいツインテールの女の子が頬を膨らましたながら怒っていた。

アサク「戦闘中に・・・つともひのHコアの掃討はコイツで終わつたんだろ？」「

そして、ヴァルシオン改から拳こぶしを引き抜き、機体を安定させ相手に向く

俺の機体はある少佐から授けいしたガーバイン・トロンベ・タイプ」という機体に搭乗している。

そして2機のガーリオンが周りを警戒しながらこちらに近づいて来る。

男性パイロット「大尉・・流石にそれは、ないつス だつて2つ向こうのエリアはさつきまで

あのーあのー「グランゾンが暴れまわってたんすよー?」

「の暑苦じくモノを言つアイル少尉は興奮していた。

それもそのはずだ その戦いの中には、

我らの長、エグザム・ベ・ブランシュタイン少佐も参戦して
いたのだ盛り上がらないハズがない。

そして、件のグラントグランゾンだが俺達が倒したヴァルシオン改より先に
戦いは終わっていたらしく、現在は掃討戦に移行していた。

マスター・アッシュ・マニ」と、ソウル・ゲインのパイロット、アク
セル・アルマーらが、止めを刺したらしい。

そんな俺達は次の命令が下るまで、その場で待機していた。

ヒリュウ改からの連絡で俺達は、クロガネに戦闘で破壊したヴァル
シオン改の回収を依頼された。

そして、俺は、ふと相棒がずっと静かにしていたことに気づいた。

アサク「おいーさつきから黙つて何してんだ オサayan やつ。」

「ちんとは、

DCにいた研究施設で破棄されていたAIを前の世界（DC）独自の技術を盛り込んだ高性能AIの名前である。（設定は後ほど記載します）

Qちゃん「イヤ、ナ一問題ハナイ、タダ注意スル点ガアル」

アサク「注意する点？」

Qちゃん「ソコノ五体満足ノ機体、何ガ起コル力分カラソ、用心シロ」

そこには開戦後に即効でサイバスターに風穴を開けられたヴァルションがあった。

アイル少尉「そつ言つこと言つとフラグ立ちますよつと！」

茶化す様にアイル少尉が言葉を返す。

その後、白井少尉達、2人がワイヤーで固定したヴァルシオン改を受け取りガーバイン・タイプ「で運ぶ。そんな流れ作業をこなしていた。

そして、恐れていた事態が、やはり起きたのだ Qちゃんの指摘通りに制御系が生きていた？

しきりに、ロックオンアラートが鳴り響く。

機能を復旧させたヴァルシオン改が運搬していたガーバインにしがみ付き

機関部を暴走させる。それに気づいた白井少尉達が、助けに入るが

リアル系では、抑えることもできます。

ヴァルシオン改とガーバインは周りを巻き込みながら、共に光に消えていった。

プロローグ（後書き）

あとからかなりの改造するかもしませんが分かってください　は
あ～文才がほしいです

～知らない場所で～（前書き）

え～誤字などを極一部書き直しました。

「知らない場所で」

「知らない場所で」

2000年8月16日 03:00時

気が付くと、あたりは暗闇に包まれていた。

(俺は…・…はあ！？) ヴァルシオンは！？)

自分の置かれた状況を思い出し、体に重力を感じながら、
目頭を押さえ、何故か停止した動力部を始動するために、考え方操
作を行う。

自分はガーバインの中にいる。シートに座つてコントロールアームを握っている。

問題無く愛機のトロニウム・エンジンに火が灯り、ナビ各所から進動音が流れ出す。

しかし・・・ガーバインのツイン・アイから入ってきた周囲の光景に驚愕してしまった。

起動してる状態のヴァルシオン改がこちらの様子を窺つているの

姿を…?

(やられんー)と思ひ、無理やりにでも、回避行動を起そつとした瞬間。

音声通信の着信音が響いた。

??.?『お互いの息災で何よりデス！ リョウ』

(誰だ？)こんな愚まつたヤツ知り合ひにいたか？)

「ちうらが考へてることを気にせず、一人喋り続けるヴァルシオン改のパイロット。

??.?『そもそも、あなたは周りに対する注意力が欠けています。いいでs・・・』

アサク「ちょい！ ちょい待つた！ …お前はまず誰だ？」

れつかから疑問だった謎を問い合わせる

??.?『…？ あなたのAI 「Q」をお忘れですか リヨウ？』

(はあ…？ 「Q」だと)

アサク「いや、待て俺の『Oちゃん』は、そんなに興奮したヤツじゃないぞ?」

Oちゃん(仮)『失礼ですね。私は、ぱ~じょんあつぱしたの『
スー』

バージョンアップしたって(汗)

アサク「つとまづか、何時ソイツを支配管理下に置いたんだよ?」

いくら高性能AIの「Oちゃん」でもシラカワ博士が作ったAIを
ハックするほどの能力はないハズだと思つ。

アサク「兎も角、何時の間にバージョンヒュしたんだよ!」

Oちゃん『転移中にデス』

カラッと即答しやがった。

追求することを諦め、周囲に目を走らせた。

視界に映るもの全てに睡然としてしまひ。明らかに異常なのだ、
思考が追いつくことを諦めるほどに。

少なくとも、先程まで自分が居た場所では無い。

記憶を辿つても、こんな場所を自分は知らない。

砕かれた建築物を、無数の弾痕が残るアスファルトの地面を、薄汚れ道端に朽ちた人形を、こんな光景を見た事が無い。

見たことがあるとするならば、戦場跡か、戦闘時中だけだ。

取り合えず自分の頬を抓つてみるがどうやら夢ではなさそうだ。多少冷静になつたので備え付けのナビの画面を操作してみる。GPSで自分が何処にいるかぐらいは分かるはずだが・・・

- ・・画面内で自機を示すマーカーはノーデータと表示される。

異常な状況に陥つてゐる事を実感するが、どうしていいか思考がまったく追い付いて来ない。歩いてる人でも居れば話でも聞くのだが、廃解した廃墟ばかりだと人が住めるのかも疑いたくなる。

(まあ、こんな場所を歩いてる人間がいても、声を掛ける気は、起きんがな・・・・・・)

内心で嘆息しつつQに視線を戻した先の遠方で一瞬光が走り遅れて大きな音が響き渡つた。

その正体を考えている間に続けて何度も光が走り、音も次第に激しくなつていく。

アサク「これで、わかつた。あつちに何かあるな」

アサクの言葉にOが一言

Oちゃん「面倒Jとはお断りデスよ。」

そして今尚、光と音が激しく響き渡る。

その時センサー 前衛から飛行する8つの光が表示される。

地面そのものを振動させながら轟音と共に何かが頭上を飛び越えていく。

幸いこちらは倒壊したビルの物陰に入り、姿は見えない。

アサク「あれは・・・PMか?それとも・・・」

PTでもMSでもないその機体は、こちらには気づかずに轟音響く後方へと飛行していった。

Q『さて、完全な整備状況ではないですが、どうしますか?』

表現が豊かになつた相棒に微笑みつつ答えた。

アサク「まずは、コントラクトを取るしかないだろ」

2機の整備不良機は、コントロールステイックを後方へ向け移動し始めた。

～知らない場所で～（後書き）

次回は、ついに戦闘ができるはず（予定です）

～小さな油断～（前書き）

考えて書いていたら一日使ってしまった　〇〇〇

戦闘描写的難しさを痛く実感した一日でした。

（小さな油断）

（小さな油断）

2000年8月16日 03:24時 <?????>

後方に飛行したPMモードキを追跡中、把握した情報の確認をしていた。

アサク「さつき「転移中にver・UPした」って言つたよな、どうしてわかつた？」

ヴァルシオン改の事で、色々と冷静さを失っていたが、次第に頭が冴えてきた。

Q『北緯・37度43分43秒 東経・139度12分42秒・・

・この場所がおわかりデスカ？』

言われた場所を搭載されてるナビで検索する。

アサク「・・・日本の・・新潟県・・日ノ出町？」

（時々見る廃墟の看板で、薄々は、わかつては、いたが日本とはな）

Q『現在の時刻は午前3時27分 西暦2000年8月16日と

断定』

(お・・・落ちついて・・冷静に考えよう・・・「いい国《119

2》作ろう鎌倉幕府」で1192年！

「いよつ国《1492》が見える」がアメリカ発見・・・。

)

あまりの事に、歴史の知識を思い出し現実逃避をするが、考えても仕方がなくなつたので機体チェックを行う。

ガーバイン本体には、Hフレームとコアトルーパーシステムが採用されている。

Hフレーム

ゲシュペNST系のGIEフレームと異なり、各フレームがそれぞれ独立した構造になつてゐる。（ムーバーブルフレームに近い）そのため簡単な検査確認ができる。

コアトルーパーシステム

ヒュッケバインMK-IIIIをコアとして、状況や目的に応じたアーマード・モジュール（武装外骨格）を接続することにより、性能や特性を大幅に変化させ、多様な運用を可能とするシステム。（UCのハードポイント・システムにコレも近い）AMガンナーとAMボクサーと各種類がある。現在、AMボクサーを装備している。

現在装備されている使用可能火器は下記のとおりである。

マシンキャノン

マルチトレースミサイル（AMボクサーを放棄しなければ、使用不可）

アサルトブレード

バースト・レールガン

ロシュセイバー

グラビトン・ライフル

ガイスト・ナックル

カタパルト・キック

ファング・スマッシュヤー

ヴァルシオン改の使用可能火器は下記の通りである。

エナジードレイン

チャフグレード

アーマーブレイカー

ウェポンブレイカー

ディバイン・アーム

クロスマッシャー

Q『現在の損傷被害ですが、外部フレーム損傷及びPR機関のアダプター断絶を確認、

現在、2つある内の1つで、運航中デス。』

（なるほど、だからあの時、起動できたのか・・・しかしできれば、回収した後に起動してほしいものだ）

いや、回収した後に、格納庫で暴れられても、それは困るが・・・

アサク「戦闘には、参加可能・・・か?」

Q『機体のモツがハミ出して、おりますが戦闘に問題はないと思われます。視認で確認わかりますが、其方の損害は?』

(モツつて・・・(汗))

アサク「抱きつかれた時の接触でボクサーの間接部がイエローシグナルだが、

後3回の戦闘は、持つと思つが・・・」

問題は山済みである。

補給 食料 整備 施設 挙げれば、数は大多数ある。

Q『これから接触する交渉次第テスネ』

話しているが戦闘空域近くに到着するには、まだ掛かりそうだった・・・

「一方戦闘空域では、

作戦は順調のようだ、先に戦闘が開始されていた他の戦域では既にBETAを殲滅したとの報告も入ってきている。

シード01「シード01よりCP、戦域情報を教えてくれ！ 一体アレはどこの部隊だ？」

突然、後方から現れた所属不明の蒼い8機の不知火を担当CPに問い合わせました。

CP『CP了解、シード01少し待て・・・わかった。アレは国連軍の特殊部隊だ、

それ以上の情報は教えられない。』

（国連軍だと？何故、国連軍が帝国軍の不知火を使用している？）

噂で聞いたことがある国連軍には、絶対の成功を求められる特殊任務部隊があり

不知火だけで編成された1個連帯隊があつたと。

その戦火は絶大なものでその過酷な任務内容から人員損耗率が最も激しい部隊だと。

「シード01よりCPへ、増援は願つたりだ至急支援を要請してくれ。」

考えてる間に支援砲撃の中を8機の不知火は、こちらを無視して、前方から来る旅団規模のバケモノ共に突っ込んでいった。

シード01「09から12は、一旦さがつて弾薬を補充しろ！02から08は、戦線を押し返すぞ。」

シード01「02、どう見る?」

シード01「02、どう見る?」

エレメントである02に聞く

シード02「……どうも嫌な感じがしますね。」

シード01の指揮の下各機が動き出す中、それは訪れた。早期レーザー照射警戒の表示の後、機体が勝手に行動を始める。

シード02「やあ……」

自分自身の制御から外れた動きによって起きた猛烈なGが掛かり、思わず悲鳴をあげてしまう。

シード05『糞!04が喰われた!早くヒヨック共をさがらせろ!』

!いい的になるだけだぞ』

僚機が煙を上げて爆散するのを視界に納めていた。

CP『CPからシードズへ、光線級の上陸を確認、繰り返す光線級の上陸を確認!速やかにコレを排除せよ!』

03の陽炎が突進して行く、自身が囮になるつもりなのか機体の高度を上げながら360度砲弾をバケモノに向けて撃ち撒くつて行く。

周りには、光線級のレーザーによつて撃破された僚機の残骸が散らばっている。

中に乗つっていた衛士は多分……即死だろう。

「あ・・・ああ

誰が叫ぶ声がするが聞こえない、思考が真っ白になつて何も考えられなくなつた。

怖い、死ぬ、そんな考えすら浮かんでこない。

ただ目の前に迫つてくるバケモノ共を真実を受け入れる」ことができなかつた。

「ひー！？」

空に幾つモノ閃光が閃く、それを視認しただけで悲鳴を上げる

周囲に視線を送ると後方から此方へ接近していく2つの青白い光を確認出来た。

（助けが来てくれたのだろうか？）

『シード07！避けるおおおおお！…』

「え？…きやあああ！…！」

意識を後方に移してゐる間に起きた衝撃に…・…・…甲高い悲鳴を上げることしか出来なかつた。

シード01（クソ！もう07は駄目か）

諦めていた刹那、レーダー後方から2つの所属不明機反応があつた
が一つが異常だつた。通常の戦術機の3倍の速度で此方に接近し、
07の元に群がっているバケモノ共を…・…・…

「殴つた」^{サブ・アーム}副腕だろうか、緑の光に包まれた拳は、バケモノ共をひたすら殴つていた。

そして、拳に集まつた光が形成し始めた。

アサク「：破を念じて、 戦^{ゲキ}と成せ！。」

そして、形を変えた粒子は光の槍を形成した。

アサク「うおおおおおお！旋風爆裂衝！」

戦を回転させ緑の光は、剣先の部分が紫になり衝撃はを放つた。地を爆走し〇七の周辺の敵を薙ぎ払つた。

遅れてきたもう1機が勢い良く地すべりをしながら、着地する。

その機体は要塞級と変わらない大きさで50メートルは、あるだろう大きさだった。

何処かで損傷したのだろう、胸に大きな傷が見えた。

その巨大な機体は、そのままバケモノ共に向かい右手を挙げた。その刹那！！

蒼と紅の閃光が、戦場に輝いた。押し押せてきたバケモノ共の波が光に触れ爆ぜた。続け様に蒼い機体は、保持している大型の剣で周囲のバケモノ共を一掃し始めた。

その光景に目を奪われてる中、もう1機の黒と赤の機体色の武御雷（？）が〇7の撃震を持って近づいてきた。

(近衛が助けに来た?いや、CPからは何も反応がない。では、この機体は?)

考えてる内に所属不明機が左手を挙げて、何かを此方に放つた。

シード01「ひー！？・・・・？？」

得体も知れないモノに攻撃を受けたが・・・何も起こらないそして外部通信が開かれた。

アサク『おい！落ち着け！貴官らの忘れモノを届けに来ただけだ。』

若い男の声だった。

大きな副腕に掴まれた07を引き渡された。

所属不明機は通信器具を引き抜くと蒼い機体の元に駆け寄りまたバケモノ共の一掃を始めたのだった。

そして、その場にいた者たちが思った。

(アレらは、何なんだ一体!?)

～小さな油断～（後書き）

早くタバコに会わせないと困つ今日この頃

～出会いも何もない～（前書き）

長く書き過ぎて一行に話が進まないですね
話を詰め込み過ぎるのも考え方ですね（汗）

「出会いも何もない」

「出会いも何もない」

2000年8月16日 03:37時 \nwarrow 国連軍横浜基地 司令
室 \nearrow

前線から来れる情報にCPオフェンサー達が慌しく動く。

青い髪のCP「副指令！ 旧田ノ出町から、超重力反応を検出された直後！ バルキリーズ後方にいた軍団規模のBETA群の・・・ 消滅を確認！？ 今尚・・・」

（重力反応！？ アメリカの... ないわね。 あれは、 そう簡単に生産できるモノでもないし、 数が限られてる。 例の計画のためにも数を確保するハズ・・・）

副指令と呼ばれた女性 香月夕呼

横浜基地の副司令であり、 物理学者でもある「オルタネイティヴ工V」の最高責任者。 自身の研究以外にも、 作戦立案や兵器の改良など多方面に才能を發揮する世界きつての天才である。

間を置かず新たな情報が飛び込む。

金髪美人CP「帝国陸軍の前線部隊から2機の属不明機は、 国連寄

下の機体かの、問い合わせが来ました。」「

（重力反応を起させたのは、間違いなくソイツらね。一番可能性が高いのはオルタネイティブ5推進派の連中でも、こんな馬鹿な手を使うとは思えないし意味がない。）

そう思いながらも、その戦術機の正体についてあらゆる可能性を考えていた。

（情報がもつと欲しいわね）

夕呼「ピアティフ！直に、伊隅達を後方に下げなさい！不明機との接触を優先させなさい。くれぐれもこっちから攻撃しちゃあ駄目よ。あちらから攻撃をしてくるなら、破壊しても、いいから、残骸の回収をさせなさい。」

ピアティフと呼ばれた金髪美人CPが指示されるなか、質問する

ピアティフ「副指令、帝国軍への返答はどうされますか？」

夕呼は、少し考え手短なCP将校に別の指示を出す。

夕呼「ソレは、じつちで処理をするからアンタは、言われた指示に従いなさい。」「

ピアティフ「失礼しました」

詫びを入れて、指示に従う。

「今、二つの声が木靈する。

二つの声「きめええええええ」

高性能AIのOでさえ、丁寧だった口調が一瞬元に戻る有様である。

アサク「なんだよ、あの生物は！まだアイнстのほうが可愛いぞ
ありやあ！！」

情けない悲鳴を上げながら、カニモドキの頭を形成された戟^{ゲキ}で叩き
潰しマシンキヤノンが、足元近くの赤黒い蜘蛛のバケモノを一掃す
る。

Q『生物物理学的に、どのような不可思議な形状は余りにも不効率
な生物と判断します』

冷静に分析をしながら、つぶらな瞳のバケモノを保持している武器
と手腕で切り裂く。

残り僅かになったバケモノ共を片付け終わった後に、異変に気付く。

アサク「一緒に居たヤツらがいない？ラインを下げるのか？それと
も、俺達が前に突出し過ぎたか？」

さつきまで、隣で肩を並べて居た、機体達がそこにはいなかつた事に気付き、残敵がないか、サーマルセンサーとソナーを交互に使う。

Q『前方5キロから、先ほどのAMモドキが此方に低空飛行で接近してきます。』

片付け終わったのだろう、Qの眷属となつたヴァルシオン改が正義の剣に付いたバケモノの体液を振り払いながら、自機の横に並ぶ。

前方に視線を移す。

くく伊隅 みちるくく

ヴァルキリー04『04より01へ！所屬不明機を視認！地上06時の方向！』

移動中、部下達が、CPから報告にあつたと思わしき部隊を視認する。包囲する様にしながら、私は不明機・《アンノウン》に対し近づく。

伊隅 みちる「各機、所属不明機を包囲。くれぐれも此方から仕掛けるなよ。」

ヴァルキリー03『大尉！向こうが攻撃して来たら、こっちも応戦

して良いんですよね？」

青い髪をポニー・テールで縛ったヴァルキリー03が質問する。

伊隅 みちる「速瀬！良いか、飽くまで不明機が攻撃して来てからだ、さつきも言つたが此方からは、絶対に仕掛けるなよ！」

血氣盛んな03に釘を刺し、

8機の不知火を接触と迎撃の2部隊に分け、2手に別れる。一旦陣形を組み直したい所だが、その隙に距離をとられて、逃げられるのも避けたい。

各所に指示を出し、自らも不明機^{アンノウン}に向けて、乗機を最大戦闘速度まで上げる。

伊隅 みちる「ヴァルキリー01からCPへ、これより不明機に対しコントакトを試みる。」

CP『CPアーティ解！不明機へのコントакトを試みる』

伊隅 みちる「ヴァルキリー01了解！」

接触するために通信端末をいじり、外部通信へと切り替える。

接触する際、隙を無くす為に3機の不知火が、両脇に並び護衛する。

伊隅 みちる「不明機^{アンノウン}に告げ」ひらは、A-01 イスミ、ヴァルキリーズ隊長、

伊隅 みちる大尉だ。聞こえていたら、所属と妙名

を報告しろ

不明機の正面に移動しながら、スピーカーで呼び掛ける。

(聞こえては・・・・いるようだが?)

2機の不明機^{アンノウン}達が交互に顔を合わせている。話しているのだろう?此方の事を気にせづに、機体を使って細かい動作で考えて話してゐる様に動く。時々、此方の顔を窺つて、また話す仕草をする。

この行動に苛立つたのだろうか?一人の衛視が叫ぶ。

ヴァルキリー03『動くな!あんた達、私達を舐めてるのこれ以上ふざけた動きしたら、撃つわよ!』

2機の不明機^{アンノウン}が慌てた様に両手を前に出し交互に振る。それはあたかも、(待つて待つて)と連想させる様に腕を振る。

伊隅 みちる「速瀬、落ち着け!副指令から安易に手を出すなと言われただろうが!!」

部下が暴走したのをみちるが諫める。

速瀬『だつて大尉!アイツら私達、無視してあんなふざけた事してるんですよ!ムカツクじゃあ、

ないですか~!』(ヴァルキリー03から以降 速瀬でお送りします。

伊隅「たしかに、そなたが向こうつも、事情があるかもしけんだろう?」

ヴァルキリー02『そうよ、もし通信端末に不具合が合つて、通信ができないかも知れないじゃない？

それにそれだけで攻撃してもしも、帝国軍の特務部隊だつたら、国際問題になるわよ。』

02が間に入り、速瀬を説得する。

速瀬『で、でも、「テモも、カカシもない！速瀬！」いい加減にしないか！我々の任務は、不明機との接触であつて、不明機の破壊は2の次だ！わかったか！…』・・・・・はい。』

流石の伊隅もキレる。口論している間に話が付いたのだろう。見慣れない黒い戦術機が近づいてくる。

武御雷の様な頭部に戦術機には珍しいツイン・アイに、肩のアーマーには飛行するためだろうか？強化外骨格を着込んでいる様に窺える。

伊隅「止まれ！此方の言葉は、わかるな？其処から、近づくな、近づけば撃つ！」

接近してくる不明機に警告を促す。黒い機体が止まりツイン・アイが、一定の間隔で点滅し始める。

「これは……モールス信号？ わ、れ、に、こ、う、げ、き、の、い、し、あ、ら、ず？ 味方、なのか…！？」

1機突出した機体は、警告された場所からこちらに左腕を向け、腕から何かをこつちに放つ（リック・ディアスの多目的ランチャーとお考えください。）

それをシールドで弾き落とそうとするが、間に合わづ、自機の胸のアーマーに付く。

(なんだ、これは通信用のケーブルか?)

放たれたモノに困惑してゐる中、隊の中で好戦的な速瀬がガーバインに突つ込む。

速瀬『あんた! 大尉に何すんのよおおおおー!』

訳も聞かず、速瀬の不知火がウェポンラックに装備されてる94式長刀を抜刀し、ガーバインに斬りかかる。それを援護するために両脇にいた不知火が突撃砲をガーバインに向ける。

速瀬が大降りで長刀を振り落とす。ガーバインは、ボクサーの片腕で受け止める。

(な!? 腕で長刀を受け止めた!?)

速瀬『あんた! 放しなさいよ! 斬りかけられないじゃない』

(あんた、そんな無茶な)

アサクが心の中でツッコんでいた。

一方、後方で見ていたQ達は、その場を動かず、前方で交戦しているアサク達を見ていた。

伊隅 みちる「速瀬、やめろ!」(さは何ともな・・・「すまない

と思つてゐる。」

突然、音信不通だつた回線が開いた。ディスプレー非表示だつたがアサク「何も言わずに打ち込んだのは、謝る。コレは通信機器だ。だから、すぐに此方への攻撃を止めてくれ。此方に攻撃する意思はない！」

通信からは、若い男の声が攻撃を止めるよう、訴えてきた。

伊隅「貴様ら、やめる武器をしまえ！」つちは、何ともない、通信用のケーブルを繋げられただけだ。」

攻撃している部下達に、自分が無事なことを教え武器をしまわせる。

速瀬『ちよつと、あんた何時まで私の長刀握ってるワケ！さつあと放しなさいよ！しまわないと大尉に怒られるの私なんだから…』

ガーバインは黙つて受け止めていた長刀を・・・・・折つた。

速瀬『んな！？あんた、覚えておきなさいよ！』

アサク『あ～すまない、こっちの周波数とそちらの通信機との相性が良くないみたいだ』

非礼の詫び聞きながら、速瀬に行つた行動には、目を瞑り、疑問に思つたことを尋ねる。

伊隅 みちる「何故、外部通信でスピーカーを使わなかつたんだ？」

アサク『…………、ヴあ！？』

(ヴあ？・・・・・変な奇声をあげるヤツだな)

如何やら、周波数を合わせることばかりを考えていって、スピーカーのことを忘れていたようだつた。

伊隅 みちる「静かにしろ、速瀬。…………繰り返す。所属と姓名を報告しり」

アサク『ならば、名乗らつ！往くぞ、トロンベ！』

突然動き出し、空中へと飛ぶ。スピーカーに切り替えたのだらつ声が聞こえてきた。

ヴァルキリーズ07『ふえ！？』の声、あのカラーリング？もしかして！？』

不意に07が叫びだす。

速瀬『あんた、あいつのこと何か知つてゐの？』

速瀬が何かを知つてゐるで有らつ07に聞く、そして07の驚愕の返答は・・・・・

07『じえ～んじえ～ん、わっかりましゃん！』

07の返答に興味があつたのだろう、何人かがコケていた。

速瀬『それにその機体は何なのよ！』

答えが出ないでイライラしている速瀬が騒ぐ。

アサク『この機体はガーバイン！ガーバイン・MK-？・トロン
べだ！』

バックから『シャキン』
手を広げて空で構える。

速瀬『じゃあ、あなたは一体何者よ！名を名乗りなさい！名を！…』

更に食うて挂かる速瀬に名乗りを上けるアサケ

(こゝまで来たから最後までせんせーをやねえや !!)

アサクはその場の空氣とテンションに身を流れ、ついに言つてしまつた。

アサケ『私の名前はレーヴェル！！レーヴェル・ファインシユメツ

この場にいたヴァルキリーズには、じつ聞こえていました。

『私の名前は謎の！！ 謎の美食家』

((謎の美食家カク ?))

(ほ、翻訳機が壊れたのか!?)

(あ～頭痛い～疲れてるのかしら)

(か、カッコいい！・・・・・￥￥￥)

(・・・・・・?)

それぞれ色々な事を思いながら、空の上で高らかにポーズを取つてゐる機体を呆れながら、見ていた。

「？？？」で、謎の美食家さんは、なんでこんなところにいる訳？其処のところ、

詳しく述べを聞きたいのだけれど？それにもう一機の衛士にも名前を教えてくれないかしら？」

突然、知らない声が通信に入る中、さつきまでの出来事をアサクは整理していた。

(衛士？このAMモドキのパイロットの事を言つてゐるのだろう。・それにあのバケモノ共とは、交戦してゐるということは、異性人かそれとも生態兵器か)

伊隅 みちる「ふ、副指令！？き、聞いていらしたんですか！？」

(どうやら、通信の相手は指令官クラスの人物みたいだな)
夕呼『何よ、伊隅！私が聞いてちゃ、いけないわけ？』

少し不機嫌になる夕呼。

(ん？どうやら、『機嫌斜めの様子だな、こには、もう少し様子を

見るか（

伊隅「い、いえ何分急な通信でしたので、彼らの遭遇はどうされますか？」

（おい！おい！何勝手に話進めてるんだよこの人は・・・アレ？あ、やべえ・・・目が霞んで来た。）

そう、いやあ・・・口々・・・37時間・・・なんも・・・食つて・
・・・

話を聞いてる中、アサクは、空腹で田の前が霞む中、あることを考えながら意思を身に流され、意識を沈めていった。

～出会いも何もない～（後書き）

感想などお待ちしております
気になつた点はドンドン言つて下さい
キツイ一言が来るのが怖いですが（汗）

「サバ味噌時々カツ丼」（前書き）

え、仕事が忙しく投稿が遅れました。ちなみに投稿日の今日も仕事です。

仕事終わりもしたのに仕事つて泣けますよね。

「サバ味噌時々カツ丼」

「サバ味噌時々カツ丼」

国連太平洋方面第11軍横浜基地病棟 診察室

目蓋が重く、腹部では、空腹で胃がうねる様な感覚に襲われながら、重い瞼を少しずつ押し上げ薄らと入ってくる光を不快に思い。

視野が少しずつ広がっていく、そこで違和感を感じる。

アサク「んにゃ？・・・ココドコデスカ？」

視界に入っているのは白い天井、病院か病室の中であらう、独特の香りが鼻に衝く。

ゆっくりと息を吐きながら、部屋を見渡そうと体を起しそうとするが、動かない、いや動けないのである。

体中には、ギブスで縛られ身動きができず、腕には、栄養剤だらうか？点滴のチューブが繋がっている。

ふと視界に・・・耳？自分の固定されている体が邪魔して、全貌は見えないが、特徴的な動物の耳が見えた。

（ウサギ？・・・そりゃあ、少佐がフランス料理で、ウサギの肉

を、使う高級料理があるって言つてたな

口から涎がタレで、慌てて口の中にもどす。（ジユルリ～）

凝視していたウサミミが、（ピヨシッコ）驚く様に飛び跳ね、正体不明のウサミミは、ガタガタ震えながら、部屋から逃げるように退出していった。

（一体何がしたかったんだ？・・・まあ、いいか）

一人取り残された部屋で一人思考に耽つていた。

（腹へったあ～！）

国連太平洋方面第111軍横浜基地 B19F 職務室

夕呼「～？～？～？～？」

芳醇な香りがする部屋で鼻歌を歌いながら、各報告書に目を通している白衣の女性がいた。

机には、サイフォン式の珈琲器具と淹れたばかりのカップが置かれていた。

夕呼は、定番の水出しタイプではなく、こだわり派のサイフォンを愛用している。

実は、作り方は意外と簡単で、とてもシンプルしかも、味は折り紙付きである。

ガラスの管の中を「一ヒー」が上り下りする事を見ているだけでも神秘的なところが気に入っている一品である

少し脱線したので話を戻そう。

夕呼（細胞組織のDNAも一緒に違ひはSTR遺伝子だけ・・・まさか、こんな形で実証されるとわね？）

その手に持った報告書の内容に喜びを感じ

夕呼「調べれば調べるほど、面白いわね、ロイツの体・・・いつそのこと解剖でもしようかしら？」

淹れたてを飲みながら、更に微笑んでいた。

夕呼（にしても、「ロイツの治療と機体の情報を交換条件にしたまでは良かつたんだだけね）

夕呼「まさか、機体のカタログデータがこんなんじゃあね～、一本取られたわ。」

PCに表示されているデータは、子供用のカタログデータだった。（簡潔に「すいへつよいんだぞ」と記載されている。）

機体を強制で調べるよう者は、片方の衛士《オちゃん》が格納庫で睨みを利かせ、近づく者を、威嚇である「デュアル・アイ」が光り調べようがない。

カツ シュ ン • • • • カツ シュ ン

夕呼一社あんた、どうかしたのそんなに体を震わして？」

若干、怯えながら黒い軍服を身に纏つた社と呼ばれた少女が部屋に入ってくる。

「…………博士…………カレが起きました…………」

夕呼「そう、なら私と一緒に来なさい。アイツと話すから……」わかってるわね?」

社「はい」

少ない受け答えで、確認を取り夕呼は、近くにある備え付きの電話でどこかに連絡を入れる。

國連太平洋方面第11軍橫浜基地病棟 病室

やる」ことないので天井眺めていた。部屋の外から慌しく聞こえてくる足音に疑問を覚えていると部屋のドアが勢い良く開かれ、何人かの武装した兵士が見え部屋の隅から一列に並ぶ。ヘルメットには

「MP」の文字が。

アサク（軍事警察・・・）これから尋問か拷問かつて所か）

MPとは平時においては軍隊内部の秩序・規律を維持し、戦時においては主に交通整理・捕虜取り扱いなどの業務を行つ兵科である。

慌しく聞こえていた音が止み。先程とは違つた女性特有に見られる音が聞こえてくるカツカツと女性物の靴の音が部屋に響く。音は段々と自分に近づき、音が止まる。

見た目は結構な美人で、白衣の下に黒い軍服からも見える豊満な付きの女性が入ってきた。

夕呼（へえ）写真で見るより良い男ね。以外に若いし、今後もし結果が良ければ、まりもにでも付けてみよつかしら）

報告書の写真と見比べると眠りこけていた顔写真が今では健康な顔に戻っているので、別人に見えていた。

夕呼「気分はどうかしら、謎の美食家さん？」

問い合わせられている内にMP達が縛られてる体を解き、元にいた場所に戻る。

アサク「・・・・カツ丼・・・」

帰ってきた言葉に笑い出す夕呼。

夕呼「・・・・ふ・・・・ふふふ、あはははは、そういえば、貴方食

い倒れで倒れたんだつけ、そりゃあ何か食べたいハズよね・・・く。

・ふふ「

相当、ツボにハマったのだから、思い出し笑いをしていた。

夕呼「はあ～、少し待ってなさい。そのアンタ！PXに行つて、カツ丼を運んできてくれない？後アンタ達、もう引き上げていいいわよ」

近くにいたMPに運んでくるよう伝え残りのMPに退室を促すが一人のMPが質問する。

MP A「御代は、誰のお支払いでしょうか？」

問い合わせを無視し、夕呼の追い討ちが来る。

夕呼「ついでに私の分もカツ丼でいいから、みなじへね。」

アサク「御しんこと豚汁付きで」

ついでとばかりにアサクが追加注文する。

MP A「はあ～わかりました。カツ丼と御しんこ、豚汁付きで2ツづつですね（涙）」

肩を落としたMPが同僚達に慰められつつ退出していった。

彼らが出るのを確認し終えて夕呼が部屋の備え付けデスクに座る。

夕呼「聞きそびれたけど、気分はどう？」

アサク「んや、コレといって得にないが強いて言つならやはり、腹が減りました。」

先程MPに守られる程から医者や看護師ではないだろう・・・何故か顔は笑顔でもコレは威嚇されているのだろうか?さつきから威圧感が半端ない。

夕呼「それはさつきも・・・聞いてなかつたわね。ところで貴方の本当の名前を教えてくれるかしら?何時までも謎の美食家さんじゃあ、呼びづらいでしょ?」

アサク(あれ?確かに偽名を名乗つたよな?まあ、いいか)

アサク「ああ・・・俺の名前は・・・リョウ・・・リョウ・・・アサクです。所属は、^{ステッペンウルフズ}ディバイン・クルセイダ・ズ ラストバタリオン 草原の狼達^{所属}コールナンバーは01 階級は大尉です」(ディバイン・クルセイダ・ズを以降DCと省略)

夕呼(ラストバタリオン・・・たしか、ナチスドイツの總統アドルフ・ヒトラーの演説の中に登場する言葉で意味は、「最後の大隊」だつたかしら?)

夕呼「そう ジャあ、貴方の事はリョウで良いわね?私は国連太平洋方面第11軍横浜基地副司令、香月夕呼よ」

アサク「別に構いませんが・・・国連軍ですか・・・自衛隊ではないんですね?」

夕呼「自衛隊?そんなの極一部の官僚が考えた夢物語じゃない。そ

「やあ、お前はまだ日本語が話せないんだね。」

ありえない事を聞いた夕呼が反論した。

アサク（あれ?）この時代の日本には、自衛隊があつた覚えがあつたんだけどな?

アサク「横浜！？つてか副指令！？その若さで准将相当地つてことですか？」

アサクの生きてきた歴史でも夕呼ぼど若さ（見た目）で司令官クラスはあまりいないので驚いていた。

夕呼「貴方の常識じやあ、そうでしそうね。まあその若さで大尉なんだから、お互い様じやないかしら?」

アサク「いやいや、俺は30歳後半くらいのおっさんで、そんな若くないねえぞ！常識とかそんなレベルでもないぞー！」

夕呼「貴方・・・嘘を付くならもつとマシな事いいなさいよ。検査で貴方の体の事は報告が来てるのよ、なんなら鏡でも見る？」

体の確認の為にストレッチをする。縛られて気づかなかつたがやつけに体が柔らかい感じがした。渡された手鏡を見て驚愕する。

アサク「わ・・・わ・・・若返つてゐううううう、ひひひひ・。」

その直後、後頭部に衝撃が走る。

夕呼「ううさいわね、私の近くで騒がないでくれる。」

手にスリッパを持った夕呼が怒鳴っていた。

アサク「いや、あまりにも衝撃的な事だつたんでは

本来32歳くらいのハズのアサクが十代も若返れば、驚くのも無理はない。

夕呼「まあ、あんたの・・・』（コンー・コンー）副指令！お食事をお持ちしました。入つてよろしいでしょうか？』・・・食事を机に置いたら、もういいわよこつちで片付けをせるから

部屋に先程のMP他に食事を持つた2人の女性とウサミミ少女が入ってきた。

夕呼「あら？珍しい社、あんたもいじりで食べたいの？」

社と呼ばれた少女はウサミミを動かして頷いた。

社「お昼がまだです・・・一緒に・・・食べます」

アサク（あ、わつきのウサミミだ、社つて言つのかこの子・・・サバ味噌か）

社の方に視線を向けるとトレイに乗っているサバ味噌を見た後にウサミミが反応して、夕呼の後ろに隠れる。

夕呼「食事を済ませながら、話を進めましょ。この後は、格納庫ハンガーで聞きたいこともあるから、それでいいわね？」

アサク「 まぢは、メシにしまじょいよ、社つてナモ」飯まだ見たい
です。」

田の前に置かれていたカツ丼にしか田を向けてないアサクが言つ
夕呼「アンタは食べる」としか、考へてない訳?まあ、いいけど社
は私の隣でいいわね」

社「はい」

一同「「いただきます」」

こつして三人で机を挟み食事を始めたのだった。

「サバ味噌時々カツ丼」（後書き）

次話は、今年中にあとあと1～2回は投稿したいですね
できればすぐにでも更新させて頂きます

～手の平サイズの家族～（前書き）

4～5回書き直していたら、投降が遅くなりました、結局やがて長くなつて最後のほうもいつも通りやがてしまいましたが、お楽しみください

（手の平サイズの家族）

（手の平サイズの家族）

2000年8月17日 12:21時

<国連太平洋方面第11軍横浜基地病棟 診察室>

アサク「・・・・BETA、ですか？」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまう。香月 夕呼は唇の端を吊り上げる、彼女独特の笑みをこぼしてみせた。食事中 いっぱいを霞と
のミニケーションに費やした俺は、食後に夕呼さんが持つてこさせた資量を情報収集のため見せてもらっていた。自分の知る歴史とは異なり多少のズレは、あつたが大きくズレはじめた歴史のターニングポイント・・・・・1944年の第二次世界大戦終結からであつた。

これは自分の世界では1年早いがコレと言つた問題は特にない。その二年後以降から自分の認知してゐる歴史と大きく異なつて来た、アメリカの宇宙総軍の設立。4年後、ダイダロス計画発足 冷戦もビックリ真っ青な人類の宇宙への進出、コレは本来の歴史より11年も早い。

50年代後半に火星で生物発見、画像送信後、音信不通になる。

60年代後半、サクロボスコ事件 プラトー1 地質調査チームが、サクロボスコクレーター調査中に火星の生命体と同種と遭遇、消息を絶つ。第一次月面戦争勃発人類史上、初の地球外生物と人類との

接触及び戦争（BETA大戦）の始まり

異星起源種がBETA : Beings of the Extra
Terrestrial origin which is A
dversary of human race ≪人類に敵対的な
地球外起源生命≫と命名される。

提供された情報はココまでである、読み終えると、夕呼の口からその後の先の話を聞かせてくれた。

そこで出てきたのが『BETA』という単語だった。

夕呼「以降、これが私達、人類の負け戦の始まり、コーラシアにあつた各国は、東から西に追い込まれるのが今の現状、一時期はこの国も落ちる1歩寸前だつたのだけれど何とか持ち直し国土回復・・・
・大体はこんな所ね・・・理解できたかしら?」

アサク「大体は、理解しました」

半分は理解し、もう半分は、半身しか聞いていなかつたので半分理解はしていた。

夕呼「本当に? 実際、貴方のその様子じゃあ、精々BETAが人類と敵対関係にあるつて事しか理解してないんじゃないかしら?」

アサク「いえ、そんな事は」

・・・ 図星だつた

夕呼「さて、今後の貴方達の処罰だけど・・・」

夕呼の言葉に眉が反応し反論する。

アサク「ちよーちよーと待つてください、処罰つて俺達が一体何をしたつて言つんですか？」

アサクが声を荒上げるのも無理はない。そもそも身に覚えのない罪・・・罪名さえ教えて貰つてもいない内に処罰されるのだ、内心たまつたものではない。

夕呼「まあ、待ちなさい、別に貴方を銃殺刑にするつて言つてる訳じゃないのよ。ただ貴方達の答え様によつては、そのまま銃殺刑はたまた、大尉待遇で『衣、食、住』の面倒付きで私の直属で働く部下・・・・・どつちかの話。ちなみに罪名なら腐るほどあるわよ、戦闘空域への無断介入及び独断戦闘、器物破損・・・・・数えれば幾つでも、罪名は出でくるんだから。」

芝居係つた物言いで投げかけて来る夕呼。

アサク「はあ・・・・・・どつち道、俺に選択権は無いんですね、わかりましたその条件でお世話になります・・・ただし条件が2つあります。」

夕呼「いいわ、言つてみなさい」

コレだけは絶対に譲れない最低順の条件を出す。

アサク「1つ身の回りの安全、2つ此方の所持品への意思の尊重、・・・以上2点です。」

夕呼「いいわ・・・・その条件を飲んであげる、その代わり、貴方達の機体は最低3回は、調べさせてもらひから・・・・・ついて来なさい！貴方の相方に会いに行くわよ・・・・・・・・・・・・・・まつたく」

呆れた様に席を立ち、すゝみ歩き出し、此方に向直り一言

夕呼「ただ・・・後でじっくり聞くから覚悟しなさい。」

その笑顔は、体が身震いするほど無邪氣で凶悪な微笑だつた。
ほほえみ

転 フリツブ

「ううん・・・・ふえん狭いよ～暗いよ～真っ暗だよ～・・・・誰か出してくださ～い！お外に出してくださ～い！」

転 フリップ

・・・狭苦しい、神経をすり減らされるよつた空間。
かなり歩いた後、ゲートとエレベーターを幾つか抜け、経由し、ア
サク達の機体が収められている格納庫ハンガへと向かっている。

エレベーターの中は、アサク、夕呼、霞の三人が乗っている。地下に移動するエレベーターがヒュンヒュンと音を立てて、エレベーター特有の浮遊感と地球の1Gの引力が俺を、俺の体を^{サイナ}苛む。

滑落感^{カツラクカン}と振動が体に加わることに、俺の中でイライラが煮詰まる。

アサク「……不味い・・選択肢^{セイセキシ}がなかつたとはいえ・・これは・・・」

夕呼「ほら、社、リヨウ、行くわよ」

・・・俺と霞は、引っ張られるような形で、長い通路を黙つて歩いて行く、厳重に管理されている一つのドアの前に立ち暗証コードを入れ終ると重い扉が開き始めた。

夕呼「……ここが横浜基地最大、最深の格納庫・・・90番^ハ
格納庫^ハよ」

夕呼の言葉と供に開き切った扉。視界から入つてくる情報に・・・
一言

アサク「寂しい格納庫^ハですね（ボソつ）」

そこには・・・入つてきた扉から格納庫^ハの奥まで何も遮る事のない広大な空間があつた。

隅の方では、自分の機体が鎮座している前で整備士だりつ、ツナギを着た人だかりがテーブルを囲んで、何かをしていた。

整備士A「いい加減に出てこ～い！故郷^{クニ}のお袋さんが悲しむぞ～」

拡声器を持った整備士が意味不明な事を告げていた。続いて

整備士B 「さうよ、いい加減に出てきたら? 食事も採らないで、引きこもつてちや、体に悪いぞ」

その光景に夕呼は、天を仰ぎ、アサクは、目を瞑らせていた。

夕呼「ウリバタケ瓜畠、アンタ達、何をしているの?」

呆れながら、部下に激を飛ばす。

ウリバタケ「何って、投降勧告してただけなんですがねえ?」

悪気がないと言わんばかりの態度に・・・夕呼は額に手を当て、深いため息を吐いた。

夕呼「時々だけど、アンタ達のその馬鹿らしさが、羨ましく思つときがあるわ・・・』『!?』『」

突然、ヴァルシオン改のハッチが開き、蒸氣が吹き上がる、中から顔を覗かす小さな物体が遠目だが見えた・・・

? ? ? 「・・・あの~お手数をお掛けしますが・・・お外に出して貰えますか?」

そう! 未来からやって来た僕らのネコ型ロ・・・ではなく、操縦コア・モジコール席の中から見える小さな人形サイズのロボットが仰々しい機械に縛られる様に絡まっていた。

一同「メイドだな(ね)」

一回声をそろえて、その光景に言葉を無くす。

「アサク「えつと……助けに行つて良いですか？」

そのままこするにも可哀想なので、助け舟を出す。

夕呼「・・え・・ああ、そうね・・・誰か、昇降機持つてきて

我に返り、近くの整備士に指示を出す。

アサク「ああ、お構いなく、素手で登るので」

そう言つと、言葉通り、躊躇無く5.5メートルはあるヴァルシオンの外装に手を掛け、よじ登つていぐ。

夕呼「まるで、猿ね

そつこいつてゐる間に、アサクが操縦席コントローラーに着く。

「? ? ? 「すみません、速くだしてください

もがきながら、体に絡みつてコードを無理やり取り外さうとする。

アサク「馬鹿、そんなに暴れると……つましい!？」

メイドロボが無理に暴れ縛られていた体が宙に舞う。そのまま重力に従う様に下に落す……した。

? ? ? 「ううううん……あれ?」

が寸での所で小さな足を掴んでいた。

アサク「ふう、大丈夫か?」

? ? ? 「はい！ありがとうございます、ちょっとビックリしただけですから、アハツ」

逆様に為りながらも、笑顔で此方に微笑む・・・がそこで終わりでは無かつた、無理な体勢で受け止めた為、今度は、アサク」と、落ち始める。

「「ぎやああああああああああああ」

ドッスン！！

体に衝撃が走り、苦痛で目を瞑る、目を開けると大きな手・・手腕マニユピュレーターの中にいた。

? ? ? 「ふう、大丈夫力？スマナイ、一時期ながら、制御系を乗つ取り返された」

外部スピーカーから相棒『Qちゃん』の声がした。下では、夕呼達が上から降りてくるアサク達を待っていた。

夕呼「貴方の相方つて人間じゃ無い訳？」

降りてきたアサクに対して、第一声がそれだった。対して、アサクは・・・

アサク「人間とは、一言も言つてませんが、コレは、俺も予想外でしたよ」

手に持つているメイドロボを前に出して言つ。

夕呼「予想外つてソレも、貴方の身内じゃないの?」

????「それは、私から、ご説明させて頂きます・・・こほん!、ほんサイバードールは、サイバーダイン社の純正指定商品です。サイバードールはサイバーダイン社の定める顧客者利用に関する以下の基本条項に基づき正しくお取扱いください。尚、その基本条項について、同意しない場合には、直ちにその使用を中止しサイバードール本体並びに付属物すべてを返し、速やかにご返却ください・・・」

????「お誕生日は?」

社「・・・・10月22日です・・・・」

????「はい!以上でユーザー登録完了です。」

先ほど長い商品説明が終わり、ユーザー登録を誰にするか、さつき

まで探めていたが、無事に靈がコーナー登録を済ませた。

メイ「先ほどは、危ないところをどうもありがとうございました。
私の名前は、メイ、サイバードールメイです。」

テーブル上に小さな体でお辞儀をするメイ

アサク「いや、結局助けてくれたコイツだからな、俺に礼は不要だ
と思つた」

そう言つてヴァルシオンに指を指す。

タ呼「で、結局、貴方とメイの関係ってなんだつたわけ?」

タ呼の言葉が広い90番格納庫に響くのであった。ハンガ

～手の平サイズの家族～（後書き）

次回も説明的な感じになりそうですが

～夕呼の契約書～（前書き）

まずは、おひやしづりです。題材オルタネイティヴ　この作品の難度に打ちのめされている現状、まったくといっていいほど進まい展開

・・・・・うじょう

～夕呼の契約書～

2000年8月17日 13:34時

国連太平洋方面第11軍横浜基地 B19F 職務室

90番格納庫を後にしたアサク達は、夕呼の職務室に来ていた。ソファーの右端から、アサク、視線を少し下げ、霞、メイの順で座っている。ちなみに、Oちゃんは、現在、近くに媒体となる機器がない為、ヴァルシオンの中から出られないでいる。

そして、現在、アサクは、恐怖を抱いている。

(ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、メイを見る目も尋常じゃないよ、つつか、目が合つたびに完全に夕呼さんの目が座つてるので…えええ)

目が合う度に、アサクは、目を背け、夕呼が睨み付ける。この掛け合いか、数分続いた。

幸い、夕呼さんの関心は、俺むしり、Oちゃんとメイにあるようで、時折、目線をじやれ合っている霞とメイに向けているが、それも時間の問題である。

ダン…！

突如、夕呼は、自分のデスクに手を叩きつけ、アサクに詰め寄る。

「いい加減、話してもらつわよ、というか、全部話しなさい。メイの事も、貴方達が乗ってきた機体のことも、洗いざらい、吐きなさい！！」

「分かりましたから、首を掴むのは、やめてくれ……」

まずい、意識が霞む。

アサクが酸素を求めてパクパクと口を開け閉めする様は、まるで池洲から上げられた魚のようであった。

興味が失せたかの様に、アサクから手を離す。咽ながらも頭が酸素を求め、体を動かす。

「あら、ごめんなさい、余りにもじらされるモノだから、つい……何事も無かつたかのように深々と椅子に座り、夕呼は話しかけてきた。

一呼吸置き、呼吸を整え、話し始める。

「人の首御締めておいて、酷い話ですね、まあ、突拍子もない話ですけど、それでも信じてもらえますか？」

「ええ……手短に御願いね……ちなみに嘘だとわかつたら、即効で独房行きね」

すこし驚いた表情をしていた夕呼だが、直ぐに引き締まつた表情に

戾っていた。

後にあの表情が、彼女が見せる数少ないシーンだった。

「実は・・・・」

（説明中）

アサクは手短にこれまでの生い立ちを語る、入隊してからの波乱万丈な生活を、異世界での戦争に巻き込まれた体験を、そして、今、自分が世界を転移する仮説を話していた。

「へえ、自分の状況は、理解しているみたいね。ちなみに、貴方、因果律という言葉、知ってる？」

そう言つとアサクは、歯切れが悪く答えた。

「哲学で、すべての事象は、必ずある原因によつて起こり、原因なしには何」とも起こらないといふ原理」

「そつ・・・・・わかつてゐなら、説明する時間が省けた訳ね・・・・・」

「

アゴに手を当て、何か考えている仕草をする夕呼

「さういえば、なんで俺なんかの話を聞くのに拷問やり血口薬を使わずに直接聞こいつとしたんですか？」

腐つてもアサクは軍人だ、軍の事情聴取とは、非常識的に、拷問、薬による血口など数えればきりがない。

「まあ、本当なら、薬漬けにして聞き出したい情報を抜き取つてから捨てても良かつたのだけれど、運が良かつたわね、貴方のA.I.が居たから、下手に刺激を与えないために、取り止めたのよ」

この時アサクは、〇ちゃんの存在にすく助けられたのである。

「ああ、おまは・・・」の書類にサインしてもらひつわよ。」

夕呼は、履歴書とサインする書類を無造作に渡し、社長イスに深々と座り直す。

仕方なく渡された契約書の契約内容に、田を通す。

第7条『甲の所有物及び甲の所得するすべての権利は、乙に所有権となり、甲は、一切の反論を禁ずる』

「・・・・・あつぶねえ、何なんですか、この契約書！サインしたら、一生、夕呼さんの奴隸扱いじゃないですか、この内容！！」

思わず現実逃避をしたくなる勢いで立ち上がる、若干だが、自分の顔が引きつってるのが、分かる。

「ツチ、気づかれたか、」

「『気づかれたか』じゃないですよ、油断も隙もない」

悔しそうに舌打ちした夕呼さんに、ヤレヤレとこう様子で俺は、履歴書の製作に掛かる事にした。

～夕呼の契約書～（後書き）

次話も、遅い遅い更新になると思いますがご愛読していただいている方々には、ご迷惑をおかけしますが、これからも頑張っていきたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444p/>

マブラヴ～流ってきた男～

2011年5月22日08時32分発行